



# 「豊かな緑」求めて都市で共同生活

## 世田谷のコーポラティブハウスにみる

「小さい庭を個人で持つより、みんなで大きな森を作って住もう」。チームネット代表取締役の甲斐徹郎さん(45)は、計画中のコーポラティブハウス(共同住宅)の入居説明会でこう呼びかけた。これに15世帯が応じて2年前に誕生したのが東京・世田谷の「**榊ハウス**」。中庭には住民みんなで資金を出して移植した樹齢250年のケヤキが立つ。庭を挟んだ向かい側は、7人の男女が風呂やキッチンを共用にして暮らす古民家「**松陰 commons**」だ。

### 天然の空調装置で快適に

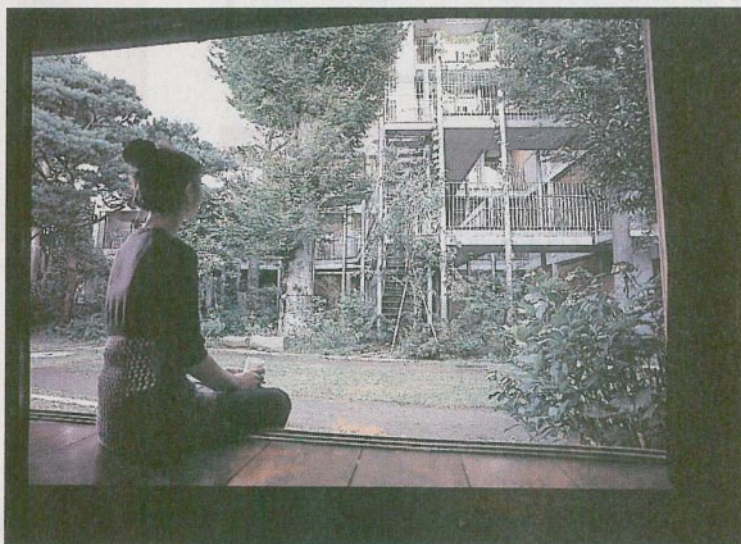
榊ハウス建設の発端は地主の鈴木誠夫さん(64)が相続に伴い土地分割を決断したこと。自分の育った緑豊かな環境を残そうと、「環境共生型住宅」の建設を前提に土地を売却したのだ。鈴木さんが生まれ育った築150年の母屋はNPOコレクティブハウジング社が賃貸管理する松陰 commons として残り、榊ハウスの庭とつながる。

樹木をはじめ、榊ハウスを覆うツル植物など敷地は緑でいっぱい。この緑が作り出す冷気を取り入れ、夏場をエアコンなしで暮らす世帯もあるという。甲斐さんは既存の植栽を「天然の空調装置」として利用する

ことで、住人の快適さと地主さん念願の環境保存の両方を実現した。

榊ハウスに暮らすグラフィック&フードデザイナー「オカズデザイン」の吉岡秀治さん(34)と知子さん(35)夫妻は、入居説明会の甲斐さんの言葉で入居を決めた。「気持ちがいい空間に住みたいけれど、都内で仕事を持つ以上田舎暮らしは難しい。自分たちが今できる範囲での快適さを考えると、この環境は理想的でした」

誰かが庭で晩酌を始めたら、自然と人が集まってくる。緑の庭を「気持ちいい」と感じるのは皆同じ。榊ハウスと松陰 commons の住人たちは、庭を共有する者同士「気を使うより、一緒に楽しもう」という考え方になった。松陰 commons に住む篠原靖弘さん(29)は、「いい環境を手に入れる手段として、共同生活という選択肢が自分の中に増えた」と語る。共有部分の掃除の仕方などで不満が出た時も、話し合っ「我慢しないで、楽しく」共に住もうルール



を改善していくのだという。

### 隣人とつながり環境を守る

「豊かさは関係が作るもの」と言う甲斐さん。自分の家だけ快適にしても、周囲の環境は悪化するばかり。それなら隣人とつながり合っ、「みんなが気持ちいい」住まいと環境を共有しようという発想だ。

みんなの快適を考えることが、ひいては都市環境の再生へとつながっていく。自分にも地球にも気持ちいい暮らしを、世田谷に生まれた「みんなの大きな森」は、私たちに教えてくれる。

松陰 commons から榊ハウスを眺める。心癒やされる風景も共有価値のひとつ